

景時讒言

土田龍太郎

治承四年、源頼朝平家追討の兵を擧げてほどなきころ、はるか陸奥國より數十騎を率て馳せ來れる弟義經と駿河國浮島原にてあひ見しをりのこと義經記につばらに説きたり。この時頼朝の喜べることひとかたならず、その上、後三年の役にて兄八幡太郎義家と弟新羅三郎義光と厨川にて出合ひしをりのことさへ想ひ偲びて落涙しきりなりけり。

しかるに頼朝と義經の仲らひいつしか疎くなりゆきて、つひにはあひせめぐ仇敵となりぬるはひとへに梶原景時の讒言に根ざせりと思ひなせる人、今に少からざるべし。

元暦二年二月、源氏すでに一の谷にて平家に打ち勝ちてさらに屋島を攻むるに先立ちて、攝津國大物浦に軍議ありき。この時梶原景時、兵船ごとに逆櫓を立つべしと唱へしかど大將義經さらに聞きいれず、かへりて景時を嘲み恥しめければ、景時また義經を猪武者に喩へしかば、すでに刃傷に及ばむとせしかども居合はせたりし宿將からうじて鎮むることをえたり。これより景時、義經に意趣を結ぶことただならず、頼朝に讒言してやまざりしさま軍記物語につばらに記せれば知らぬ人としてはまれなるべし。

景時の心術正しからず、主頼朝の信任に伐りて日ごろよりややもせば儕輩の功を嫉み謗るを習ひとせしかば景時を憎むもの營中に少からず。されば右大將みまかりてほどなき正治元年十月、御家人二十人あまり連署して景時を鎌倉より追ひ放ちたり。次の年、景時都に上る道すから、駿河國清見關のほとりにてかしこのつはものに一類もろとも討ちとられ骸を路地に曝せしはげにはかなき身のはてなりとこそ云ひつべけれ。

景時の奸邪をたくましくせしはさることなれども、その智謀深く才學に富めることならばなかりければ、世にありきたれるなべての佞人の列には數ふべからず。心敏きことただならず、時にのぞみて利害得失をたちどころにえ見定めけむこと、かの石橋山の戦ひに敗れて伏木の内に隠れみたりし頼朝を見ぬふりして助けし一事にても知るを得べし。

景時の肝太きことまたなのめならず、朋輩のえなさぬ荒わざをこともなげになしとげしいさがあり。上總大掾介八郎廣常とてややもせば頼朝の心にさかふものあり、ひそかに失はむとせしとき、景時命を含みていともたやすく廣常が首をとり來りしさまあさましいふもおろかなり。

ソノ介八郎ヲ梶原景時シテウタセケル事、景時ガカウミヤウ云バカリナシ。雙六ウチテサリゲナク盤ヲコヘテ、ヤガテ頸ヲカイキリモテキタリケル、マコトシカラヌ程ノ事ナリ。

と愚管抄に記せるは、いとも言短かなれども、景時の面目を傳へてあますところなし。

頼朝の景時の奸佞をさらに知らざりきとはえしも思はれねども、その智謀及ぶものまれにておのが覇業成就に缺くべからざりしかば、見棄て斥くることはつひにえせざりしにまぎれなし。

そも頼朝の義経を疎みしは、景時の逆櫓論議より後のことにてはあらず。一谷の合戦ありてほどなく、義経右衛門少尉せうじやうに任じ使の宣旨を蒙りしとき、頼朝の氣色すこぶる悪しかりしこと、東鑑元暦元年八月十七日の條に記せり。軍略武勇の方に並びなき義経、おのが弟にてはあれど骨肉の争ひのつひに避りさがたからむこと頼朝の聰明もてえ悟らぬことわりさらにあるべからず。景時またおのが主の覇業にとり義経の必ず妨げとならむことをつとに見究めたりしこと疑ひなし。されば頼朝、景時の讒言に惑ひて義経を斥けしにてはあらず、むしろ景時の讒言をひそかに待ちみたりしにほかなかるべし。

(令和四年十二月十二日受附)